

口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方气象台

< 噴火警戒レベルを 3 (入山規制) から 2 (火口周辺規制) に引下げ >

新岳火口では、2 月 3 日以降、噴火は観測されていません。

新岳火口付近のごく浅い場所を震源とする火山性地震は 2 月以降減少し、概ね少ない状態で経過しています。新たなマグマの上昇を示すと考えられる、新岳の西側山麓のやや深い場所を震源とする火山性地震は、2018 年 8 月 16 日以降観測されていません。

火口内の熱の高まりを示す火映は、2018 年 12 月以降観測されていません。山麓からの観測では、新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の噴煙や地熱域の状況に特段の変化は認められていません。

このように、火山活動はやや低下した状態で推移しており、新岳火口から概ね 2 km の範囲に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなったと判断したことから、本日 (12 日) 11 時 00 分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを 3 (入山規制) から 2 (火口周辺規制) に引き下げました。

一方、火山ガス (二酸化硫黄) の放出量は、やや多い状態が続いていることから、引き続き小規模な噴火の可能性がります。

【防災上の警戒事項等】

新岳火口から概ね 1 km の範囲 (図 1) では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、新岳火口から西側の概ね 2 km の範囲 (図 1) では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

活動概況

・ 噴煙など表面現象の状況 (図 2、図 3、図 4 - 、図 5)

新岳火口では、2 月 3 日以降、噴火は観測されていません。

火口内の熱の高まりを示す火映は、2018 年 12 月以降観測されていません。5 月 29 日に山麓から実施した目視及び赤外熱映像装置による観測では、新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の噴煙や地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ (<https://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>) や気象庁ホームページ (https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php) でも閲覧することができます。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用しています (承認番号: 平 29 情使、第 798 号)。

・火山ガスの状況（図 4 - ）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、4 月 11 日に 1 日あたり 1,000 トンと一時的に多い状態となりました。その後は減少しましたが、現在も 1 日あたり 100～300 トンと、やや多い状態が続いています。

・地震や微動の発生状況（図 4 - ~ ）

新岳火口付近のごく浅い場所を震源とする火山性地震は 2 月以降減少し、概ね少ない状態で経過しています。

新たなマグマの上昇を示すと考えられる、新岳の西側山麓のやや深い場所を震源とする火山性地震は、2018 年 8 月 16 日以降観測されていません。

・地殻変動の状況（図 4 - 、図 5 ）

GNSS 連続観測では、島内の長い基線において、2016 年 1 月頃から緩やかな縮みの傾向が続いていましたが、2018 年 7 月頃から停滞しています。



この図は、国土地理院『地理院地図』を使用して作成しています。

●噴火警戒レベルに応じて下記のような防災対応が必要になります。

レベル 5（避難）：危険な居住地域からの避難。

レベル 4（避難準備）：警戒が必要な居住地域での避難準備。要配慮者は避難等。

レベル 3（入山規制）：火口から概ね 2 km 以内の立入禁止 ○ の範囲内。

レベル 2（火口周辺規制）：火口から概ね 1 km 以内（西側は概ね 2 km 以内）の立入禁止 ○ の範囲内。

レベル 1（活火山であることに留意）：状況に応じて火口内への立入規制等。

■この図は、口永良部島火山防災協議会と調整して作成しています。

■各レベルにおける具体的な規制範囲等については、地域防災計画等で定められていますので、詳細については鹿児島県及び屋久島町にお問い合わせください。

●：一般道
■：登山道
●：新岳火口
●：居住区域
○：レベル 3 の規制箇所
○：レベル 2 の規制箇所

図 1 口永良部島 警戒が必要な範囲

新岳火口から概ね 1 km の範囲及び新岳火口から西側の概ね 2 km の範囲（橙線）

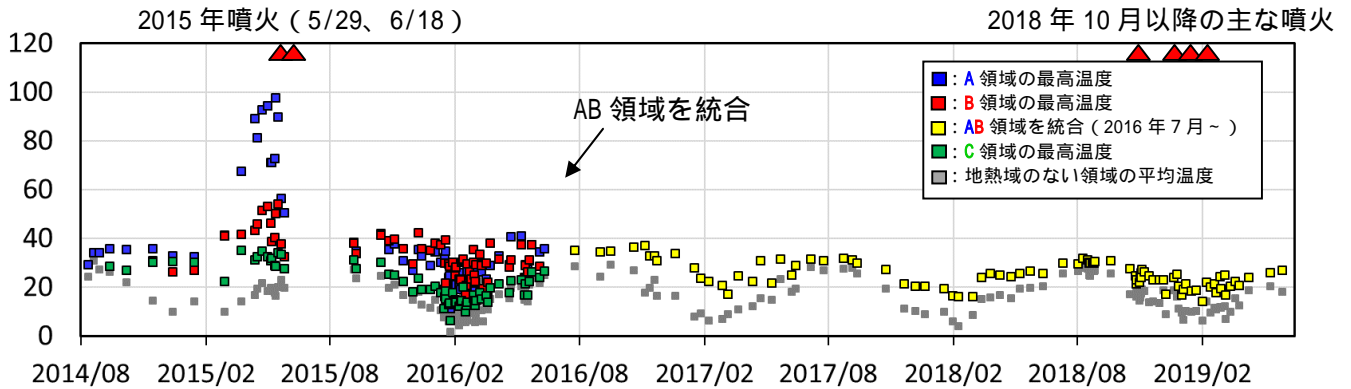
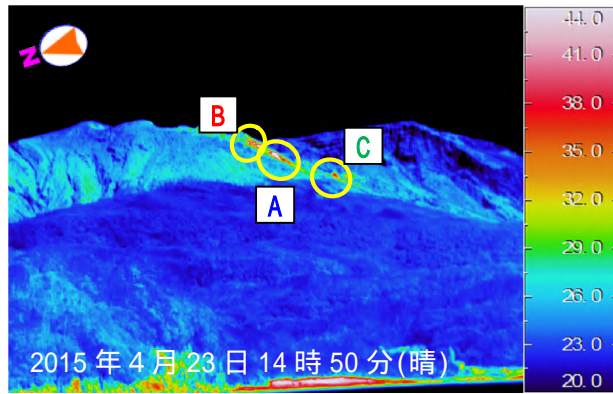


図2 口永良部島 新岳西斜面及び新岳南西側斜面の地熱域の温度時系列 (2014年8月~2019年5月)

赤外熱映像装置による観測では、新岳火口西側割れ目付近 (AB領域) には依然として地熱域が存在するものの、2017年頃から温度の低下した状態が続いています。

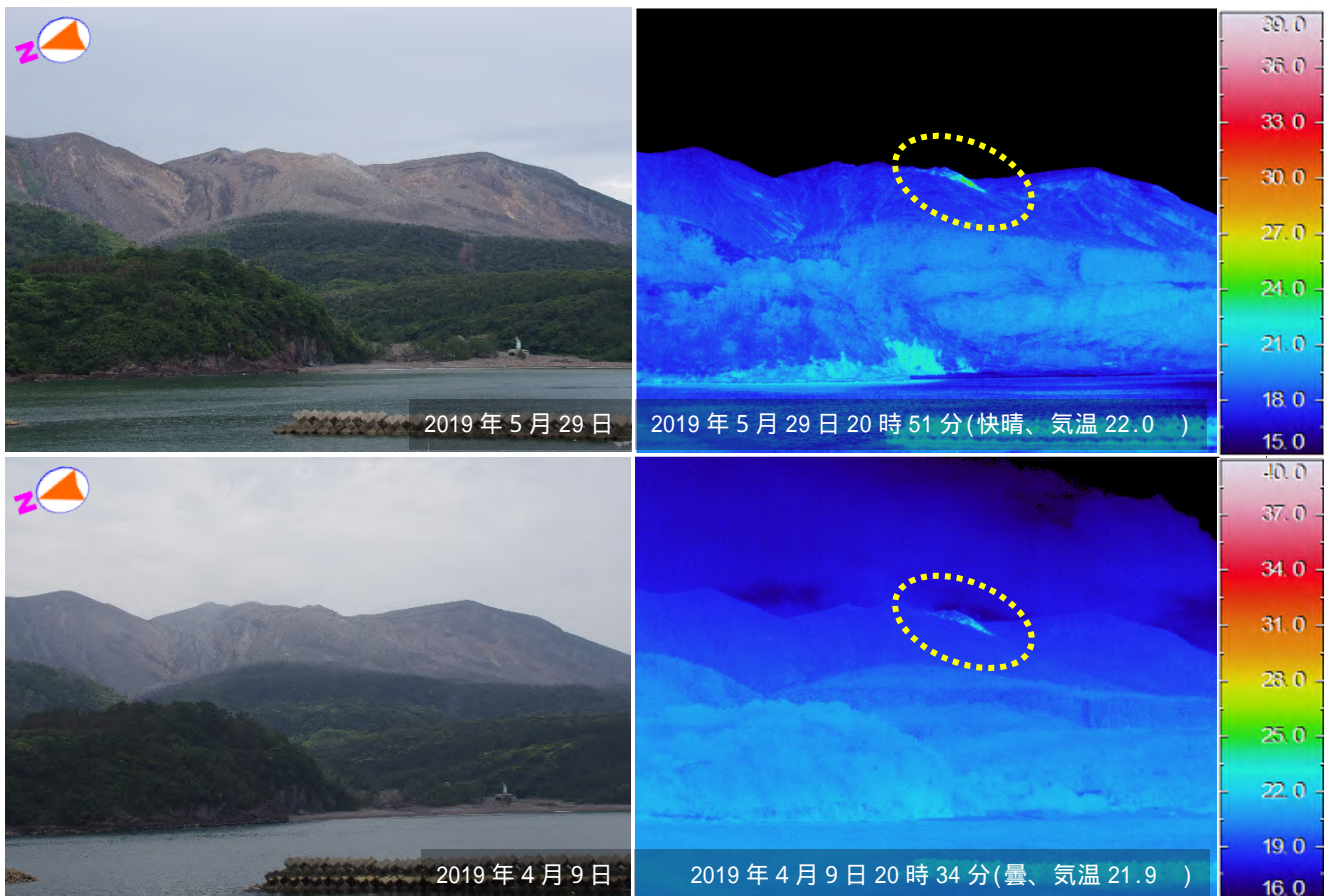


図3 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況 (本村から観測)
5月29日に実施した現地調査では、地熱域 (黄破線) に特段の変化は認められませんでした。

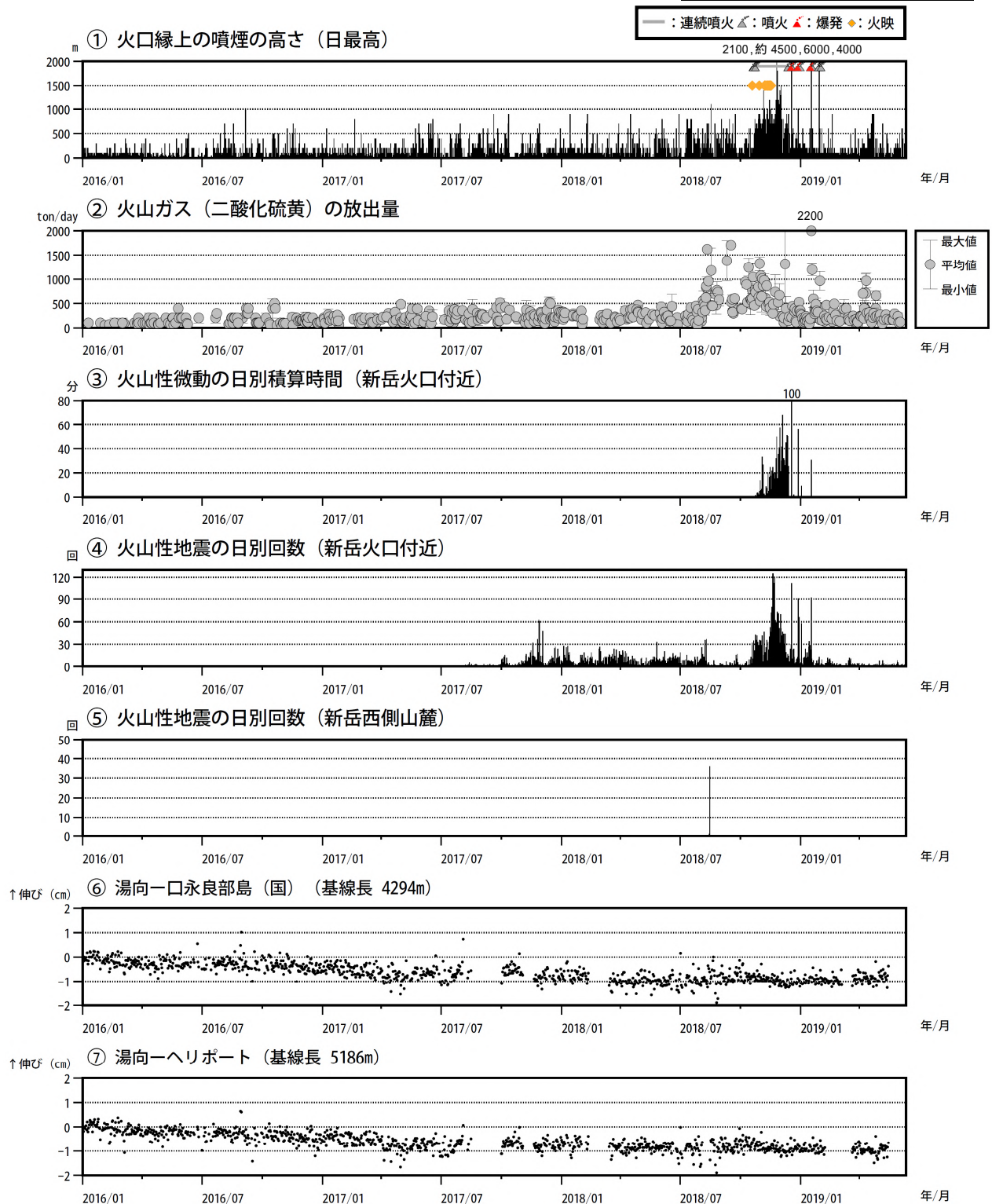


図4 口永良部島 最近の火山活動経過図（2016年1月～2019年6月10日）

- ・新岳火口では、2月3日以降、噴火は観測されていません。
- ・火口内の熱の高まりを示す火映は、2018年12月以降観測されていません。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、4月11日に1日あたり1,000トンと一時的に多い状態となりました。その後は減少しましたが、現在も1日あたり100～300トンと、やや多い状態が続いています。
- ・新岳火口付近のごく浅い場所を震源とする火山性地震は2月以降減少し、概ね少ない状態で経過しています。
- ・新たなマグマの上昇を示すと考えられる、新岳の西側山麓のやや深い場所を震源とする火山性地震は、2018年8月16日以降観測されていません。
- ・GNSS連続観測では、島内の長い基線（ ）において、2016年1月頃から緩やかな縮みの傾向が続いていましたが、2018年7月頃から停滞しています。

基線は図5の に対応しています。また、基線の空白部分は欠測を示しています。（国）：国土地理院

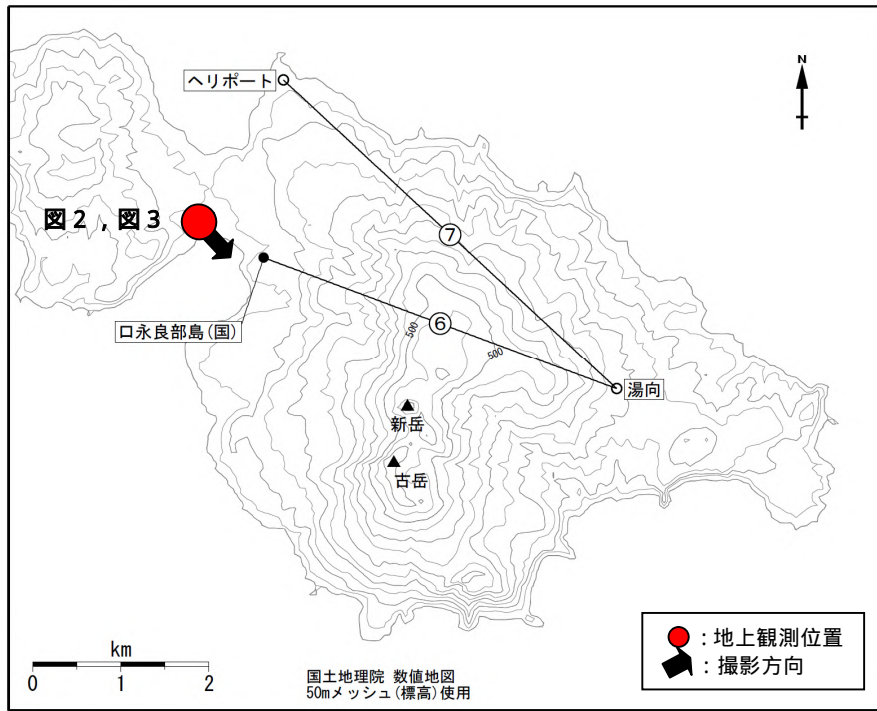


図5 口永良部島 観測位置及び撮影方向とGNSS連続観測点及び基線番号

小さな白丸()は気象庁、小さな黒丸()は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国): 国土地理院

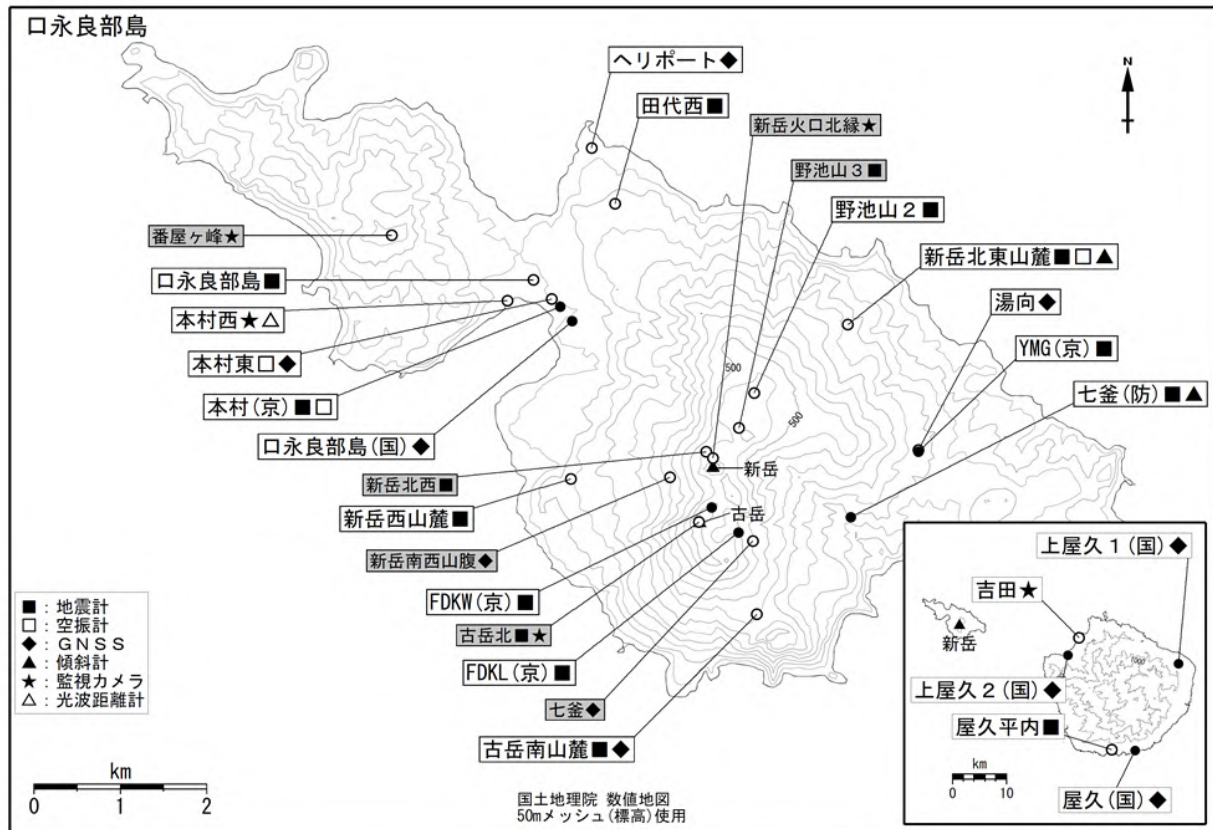


図6 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸()は気象庁、小さな黒丸()は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国): 国土地理院、(京): 京都大学、(防): 防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。